

6 - 2 中国東部・近畿北部・北陸地域における地震活動

(1985年7月～1985年12月)

Seismicity in the Eastern Chugoku, Northern Kinki and Hokuriku Districts,
Southwest Japan (July. 1985 - December. 1985)

京都大学防災研究所 鳥取微小地震観測所

北陸微小地震観測所

京都大学理学部 阿武山地震観測所

Tottori Microearthquake Observatory and Hokuriku Microearthquake
Observatory, Disaster Prevention Research Institute,
Abuyama Seismological Observatory, Faculty of Science;
Kyoto University

第1図に鳥取微小地震観測所の結果を示す。この期間も前半の6ヵ月(1985年1～6月)と同じく全般に静穏であった。特別な地震活動としては、Aは1985年7月2日M4.9を主震とし9月初めまで続いた大山付近の群発地震活動で、本会報前号¹⁾に報告済である。Bは1984年5月30日山崎断層の地震(M5.6)²⁾の余震である。Cは1985年10月22日の播磨灘の地震(M4.5)とその余震であるが、これも前号に報告されている³⁾。

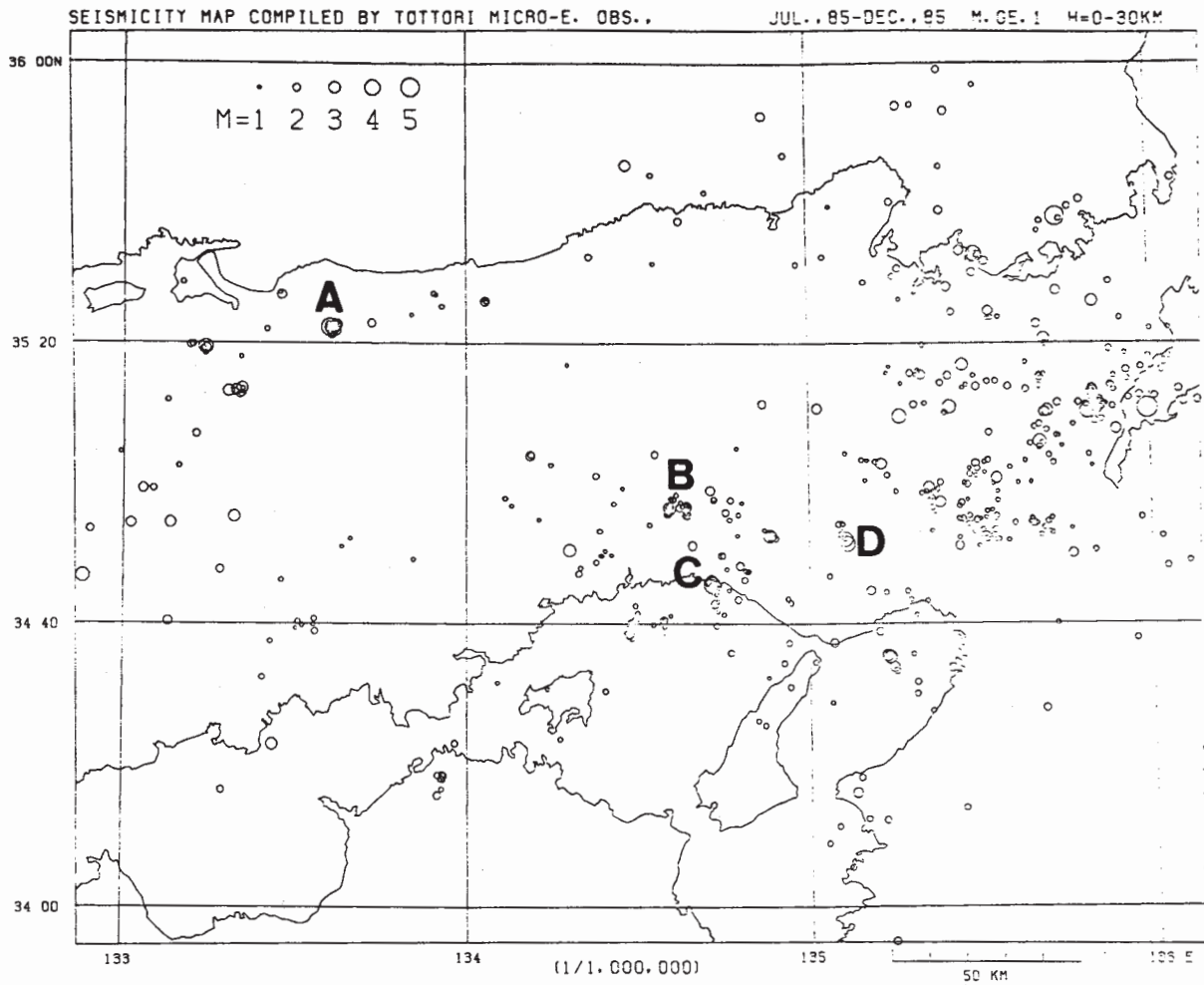
第2図は阿武山地震観測所の結果であるが、いくつかの興味ある活動が見られる。全体の特徴としては、琵琶湖西岸部に顕著な地震活動が起こり、次第に北部へ(京都・福井県境から若狭湾へ)移行したことが目立つ。Dは6月5日に始まった群発地震で7月8日のM3.8の最大の地震は明石で有感であった。Eは点線で囲まれた一連の地震活動を示す。先ず1に1985年10月3日M5.6の花折峠の地震が発生した(前号に報告済⁴⁾)。その後10月10日頃沖の島北西(図中2)に活動が移動し、次いで3へ、更に11月7日、1の北方6kmの4へ移動した。すなわち、これらの地震活動は1の点から時計廻りに1周した様に見える。図中の文字Fのすぐ南側に、ほぼ東西に延びる約50kmの線状の分布が見られる。

FとGは、北陸微小地震観測所による第3図のものと同じである。Gは1985年12月15日鋸崎付近のM4.0、Hは11月27日常神岬付近のM5.1の地震である。

参 考 文 献

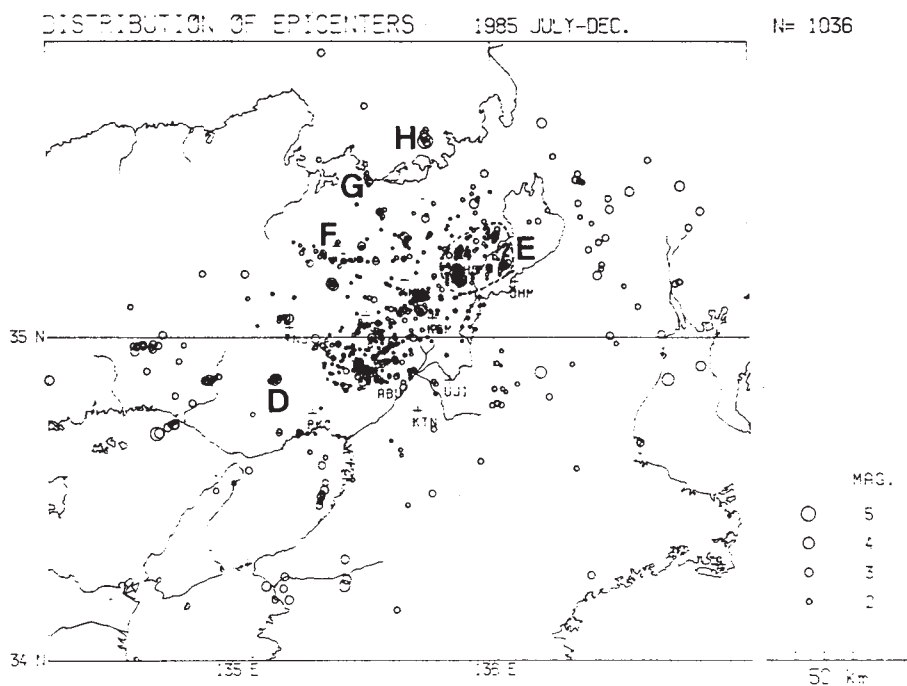
- 1) 京大防災研鳥取微小地震観測所・鳥取大学地学教室：1985年の大山付近の群発地震活動，**35** (1986)，375 - 379.
- 2) 山崎断層研究グループ：山崎断層の地震(1984年5月30日，M5.6)について，連絡会報，**33** (1985)，355 - 382.

- 3) 京大防災研鳥取微小地震観測所・京大理地球物理学教室:1985年10月22日播磨灘の地震(M 4.5) について, 連絡会報, 35 (1986), 370 - 374.
- 4) 京大理学部・京大防災研究所:花折峠付近の地震 (1985年10月3日, M= 5.0) について, 連絡会報, 35 (1986), 360 - 369.

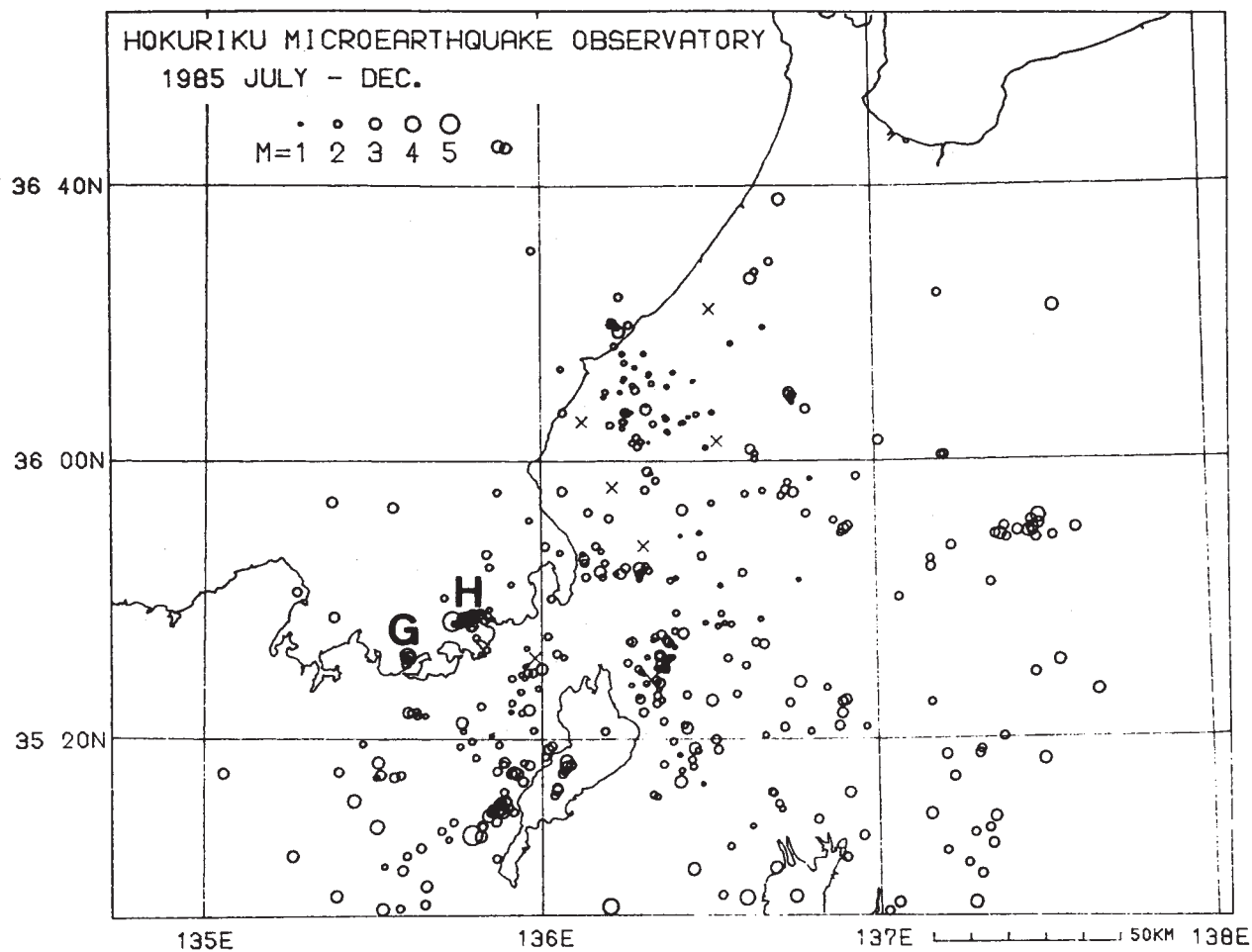


第1図 鳥取微小地震観測所による震央分布図 (1985年7月~1985年12月)

Fig. 1 Seismicity map by the Tottori Microearthquake Observatory (July, 1985 - December, 1985).



第2図 阿武山地震観測所による震央分布図 (1985年7月～1985年12月)
 Fig. 2 Seismicity map by the Abuyama Seismological Observatory (July, 1985 - December, 1985).



第3図 北陸微小地震観測所による震央分布図 (1985年7月～1985年12月)
 Fig. 3 Seismicity map by the Hokuriku Microearthquake Observatory (July, 1985 - December, 1985).